

## はじめに

9章の文脈を振り返ってみましょう。パウロは7つの特権が与えられているにもかかわらず、多くのユダヤ人が福音を受け入れていないという現実にも深く心を痛めていました。パウロの苦悩は、同胞たちが福音を受け入れることができるのであれば、自分自身を身代わりとして差し出すことも厭わないほど深刻なものでした。しかし、パウロは多くのユダヤ人が福音を拒絶したからといって、神の約束や神の言葉が無効になったわけではないと述べています。彼は歴史を振り返ってみると、イスラエル人として生まれた者が常に真の信仰者ではなく、いつの時代も真の信仰者は少数であったことを指摘しています。

その例として、パウロはアブラハムの子どもとイサクの子どもの例を挙げました。アブラハムには8人の子どもがいましたが、神がアブラハム契約の後継者として約束されたのはイサクだけでした。この例は、神の選びが血筋や人間の基準によらず、神の計画と目的に基づいて行われることを示しています。アブラハムの他の子どもたちは、アブラハムの子であるという血筋を持っていましたが、契約の後継者となるためには神の選びが必要でした。

ではイサクは本妻の子だったから選ばれたのか。そのような質問が出ることを予想して、パウロは次にイサクの妻リベカが生んだ双子の息子の例を挙げました。リベカが生んだ双子の息子たちは、本妻という意味では同じ条件でした。彼らは同じ母親から生まれた双子でした。しかし、神は二人が生まれる前にリベカに「兄が弟に仕える」と告げたのです。この預言は、神が人の行いに先駆けて選びを行い、神の主権が働いていることを示しています。神は人々の心を見抜き、計画を進めるために選びを行います。その選びは、血筋や人間の努力によるものではなく、神の主権によって行われるのです。

確かに、神の選びについての教えを聞くと、私たちは不公平さを感じる場合があります。しかし、この疑問が生じることを予想し、パウロは読者の「神に不正があるのでしょうか」との問いを強く否定します。そしてここでも出エジプト記から2つの物語と神のこぼを引用します。

一つはモーセが神の後ろ姿を見たという個所です。モーセは大胆にも神の栄光が見たいと神に願いました。人は神を直接見たならば死ぬというのが一般的なユダヤ教の考えです。

なぜなら、神の栄光は聖く神聖な存在であるため、罪と弱さを背負った存在である人間が直接的に接触することはできない。人間は神の栄光に直面すると、その存在の圧倒的な威厳や力によって、身体的にも精神的にも耐えられないからです。

しかし神はそれをモーセに許されました。モーセを岩の裂け目に隠し、そしてそのそばを通り過ぎられました。その間モーセが死んでしまわないようにご自身の手で覆われました。それでモーセは神の後ろ姿、つまり神の栄光の残像を見たのです。神の栄光は人間には直接見ることができないものですが、モーセには特別な機会が与えられました。神がその時おっしゃった言葉が「わたしは恵もうと思うものを恵み、あわれもうと思うものをあわれむ」です。つまり神はご自身の意志で特定の人を恵む権利があるのです。

もう一つの物語は反対の例です。イスラエルの民がエジプトを脱出する際に、エジプトの王ファラオを神に頑なにされました。イスラエルの民がエジプトを去ることをファラオが10回も頑なに拒否した結果、神はエジプトに激しい10の災いをもたらしました。最後にはエジプト中の長子、が殺され、ようやくファラオはイスラエルの民が去ることを許可しました。しかし、ファラオは追い出した後すぐに、心を変えエジプト全戦車と騎兵を率いてイスラエルの民を追跡しました。しかし、神はモーセを通じて紅海を割り、一晩の間、海を乾いた地とし、水は彼らのために壁となりました。イスラエルの民は一晩かけて紅海を渡りきりました。民が渡り終えると、海は元の状態に戻り、追いかけていたファラオとエジプト軍は水に飲み込まれ、海のもくずと消えてしまい誰も生き残ることはありませんでした。

注意しておかなければならないのは、神がファラオを頑なにされたというのは、神がファラオに罪を犯させたということではありません（これはイエスを裏切ったユダにも言えます）ファラオが自分の意志で頑なに became のを神が許され、そのことを用いて神の計画を進められたということです。神は人々の心の中に働きかけることができますが、それは自由意志を侵害するものではありません。ファラオは自らの意志で頑なに became イスラエルの民を追いかけてきました。しかし、神はこの出来事を用いてイスラエルの民に奇跡的な救いを与え、ご自身の栄光とされました。

このファラオに対して神は語られたのです。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである」。パウロは言います **9:18** ですから、**神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです**。つまり神はご自身の意志に基づいて、特定の人々に恵みを与える権利を持っています。また、神は人々が頑なに became を許す権利も持っています。

## 1. 陶器師と粘土

読者の疑問はこうです。9:19 **すると、あなたは私にこう言うでしょう。「それではなぜ、神はなおも人を責められるのですか。だれが神の意図に逆らえるのですか。」**

つまり神が、生まれる前から特定の人に恵みを与え、また頑なにされる。それが神の決定であるならば、確かに私たちはそれに逆らうことはできません。そのように決めておられるならば、神が人の罪を責められるのは理不尽ではないか。という疑問です。これに対して、パウロはこの質問には直接答えないで、このような質問をする人の態度を問題にします。パウロは旧約聖書の有名な例話を用いて、質問者の立場をわきまえない思いあがった態度をきつく非難します。

9:20 **人よ。神に言い返すあなたは、いったい何者ですか。造られた者が造った者に「どうして私をこのように造ったのか」と言えるのでしょうか。**

陶器が陶器師に、なぜこんなふうにも私を造ったのですか、私は普段使いのお茶碗は嫌です、美術館に飾られるような作品にしてください。などとは言えません。被造物に過ぎない私たち人間は、創造者に対して何一つ文句を言う権利などないのです。この神と人間との絶対的な違いをパウロはこの例話は通して語ります。この例話は、神と人間の関係を正してくれます。神は陶器師であり、私たちは粘土なのです。

9:21 **陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。**

もちろん、すべては陶器師の自由です。器は、ただ黙って従う以外にはありません。役に立たない器であれば捨てられても何一つ文句言うことはできません。この例話の背景にあるのは、イザヤ書です。

イザヤ 29:16 **ああ、あなたがたは物を逆さに考えている。陶器師を粘土と同じに見なしてよいだろうか。造られた者がそれを造った者に「彼は私を造らなかった」と言い、陶器が陶器師に「彼にはわきまえない」と言えるだろうか。**

神の選びに対して、不公平ではないか、という態度はこの陶器が陶器師に文句を言っているような、逆さの考え方だとパウロは言います。あくまでも神は陶器師であり、私たちは粘土（陶器）なのです。陶器師は粘土を形作り、自分の思いに従って作品を創り上げます。同じように、神は私たちを創造し、私たちの存在を決める創造主です。私たちは神によって形作られた被造物であり、神の意志に従って存在しています。

ともすれば、神を人間社会の延長くらいにしか考えていない人にとって陶器師と器の例えは衝撃的です。しかしこれこそが聖書が語る神と被造物である人間との関係なのです。造られた者は何一ついい逆らうことができない、この神と人間の絶対的な違いを理解しないと聖書の教えを理解することは困難です。

## 2. あわれみの器

9:22 それでいて、もし神が、御怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられたのに、滅ぼされるはずの怒りの器を、豊かな寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうですか。

ローマ人への手紙3章11節ですでに学んだ通り、すべての人間は罪人であり、義人は一人もいません。本来ならばすべての人間は神の御怒りを受けて滅んでしまう存在です。滅ぼされるはずの怒りの器とは、罪によって神の怒りにさらされる者のことです。しかし、器を滅ぼすのも神の自由ですが、滅ぼさないのも神の自由です。

驚くべきことに神は、怒りを示してご自分の力を示すのではなく、滅ぼされるはずの私たちに憐れみと忍耐によってご自分を表されたのでした。

9:23 しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられたあわれみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。

あわれみの器とは、神がユダヤ人と異邦人の両方の世界から選ばれ召された私たちクリスチャンのことです。もし神の選びがなかったら、すべての人は滅びたのです。このことを忘れてはなりません。神の前での謙遜を学びましょう。

9:24 このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。

ユダヤ人信者だけでなく、私たち異邦人クリスチャンも神の選びを受けました。つまり「あわれみの器」とされたのです。この神の計画を証明するために、パウロは預言書のホセア書を引用します。

## 3. 神の愛と忍耐

9:25 それは、ホセアの手紙でも神が言っておられるとおりです。「わたしは、わたしの民でない者をわたしの民と呼び、愛されない者を愛される者と呼ぶ。

9:26 あなたがたはわたしの民ではない、と言われたその場所で、彼らは生ける神の子らと呼ばれる。

ホセアは、唯一の神に背いて異教の神に走ったイスラエルを「姦淫の女」に喩えました。そのような人たちは、本来は石打ちにされて殺されました。イスラエルにはもう神に愛される資格も、神の民と呼ばれる資格もありませんでした。しかしこの言葉によって、イスラエルは回復したのです。そうであるならば、文字通り神の民ではなかった異邦人を神が呼ばれた（召された）からといってなぜ驚くのでしょうか。

これは、ホセア書 2：23 と 1：10 からの引用です。ここでパウロは、ラビ的引用法「文字どおりの解釈と適用」を用いています。ホセア書の預言は、本来は異邦人について述べているのではなく、イスラエルが将来、神の寵愛を回復することについて述べています。しかしパウロは、神が異邦人を御自分の子として認めることにこの節を適用しています。これは、聖霊が旧約の聖句を新約に引用されるとき、聖霊が望まれるとおりにそれを正しく適用することができるという例証です。

9:27 イザヤはイスラエルについてこう叫んでいます。「たとえ、イスラエルの子らの数が海の砂のようであっても、残りの者だけが救われる。

9:28 主が、語られたことを完全に、かつ速やかに、地の上で行おうとしておられる。」

イザヤは、国そのものは途方もない数に成長しても、救われるのはイスラエルの子供たちの少数派だけだと予言していました（イザ 10:22）。残された者（レムナント）とは人々が偶像礼拝をしても、最後まで主に信頼して救われる者。イスラエルだからと言って、誰でも救われるのではない。主に信頼する者だけが救われる。同様に異邦人であっても主に信頼するものは救われます。

9:29 また、イザヤがあらかじめ告げたとおりです。「もしも、万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったなら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになっていたであらう。」

イスラエルに、たとえわずかであっても残された者（レムナント）がいなかったら、ソドムとゴモラのように完全に滅ぼされていたであらう。

これは、イザヤ書 10：22～23 と 1：9からの引用です。この預言は、神の計画はレムナント（イスラエルの残れる者）を通して実行されるということを教えています。ユダヤ人が滅亡しなかったのは、レムナントが存在していたからです。現在、多くのユダヤ教徒は、メシニック・ジューが増えることは国が亡びることにつながる、と考えています。しかし、事実はそれとは逆でユダヤ人にメシアを伝えることは、イスラエルという国を守ることになります。イスラエルのために祈り、イスラエルを援助することは私たち自身に帰ってくる祝福でもあります。

## おわりに

器でいえば、日本には古来から壊れたり、欠けたりした器を修復する技法として「金継ぎ」というものがあります。漆を使って修繕する方法です。千利休が知見を広めそうです豪華絢爛さより情緒を重んじた詫び寂びを求め、不完全な物の中に美を見出そうとしたそうです。土の器を創造される神は、それをどのようにも用いることができになります。滅ぼさずであった器を再び生かして用いることさえなされます。まさに神こそ究極の金継ぎアーティストです。そもそも人間が墜落した時に、神は被造世界を一度破壊して、もう一度作り直すこともできたはずですが、神はむしろ壊れた器を再生する道を選びました。それが神の救いの物語です。それは神の民の誕生と滅亡と再生の物語。神の民の絶えざる出エジプトであり、新しい神の民の創造です。そのような計り知れない神の愛の大きさを見よと預言者たちは語りました。選民認識やプライドを捨て、いかなるものをもご自分の民としてくださる神の福音の豊かさに圧倒されよと、その実現こそがキリストの福音に他なりません。キリストの福音こそ壊れた私たちを金継ぎする漆です。

神は初めから尊い器と卑しい器を分けて造られたとは言われていません。それぞれが等しく神の作品なのですが、その用いられ方が違う。それはただ神のご計画によるということです。逆に言えばどのような器であれ、神はお用いくださるということです。私たちの目には、自分のようにみすぼらしい器など何の役に立つのかと見えるかもしれませんが、けれども、そこに神があふれるほどの愛を注いでくださるとしたらどうでしょうか。愛する御子の命をこんな小さな私の器の中にさえ、注いでくださるとしたらどうでしょうか。ですから、私たちは自分で自分の価値を決めてはいけません。造り主である神が捨てなかった器をどうして私たちが自分で砕くことができまるでしょうか。御子イエスの命が注がれた尊い器をどうして価値がないなどと言えるでしょう。神はご自分の主権の中で、一人一人の人生の上にご計画を持っておられるのです。

この国の残りの者「あわれみの器」として、神を正しく恐れ、神に信頼して歩ませていただきますように